

鮮卑の帶金具

町田 章

中国北方で活動した騎馬民族はツーピースの胡服を着て、上着の腰にベルトを締めた。かれらは文様で飾った骨製や金属製の板を帶留めにして用い、それらが速く西方の諸民族が用いた服飾品と共通していることはよく知られている。黄河流域の中原地方では春秋時代から戦闘服として胡服が広く採用され、帶鉤という中国独特の帶金具を発展させた。東周時代には北方民族と交流する中原の王侯が、胡族のために帶留めの飾り板を特別に製作して塞外の酋長に贈った。

筆者は以前に中国と日本の帶金具を検討したとき、西漢から西晋にかけての時期に行われた腰帶の鉤具を長方形無鉤式鉤具(西漢式)、馬蹄形打出鉤具(東漢式)、U字形透彫鉤具(晋式)に大別して論じたことがある(町田章1987)。その後に帶金具を取り上げて論及した志賀和子や孫機も名称を異にするもののこの分類によっている(志賀和子1985・2002、孫機2001、以下で両氏の意見を引用するときにはこれら論文により一々引用しない)。小論では、始めに漢代の帶金具を概観した後、主題である晋代に遊牧民の鮮卑が好んで用いた帶金具について論を進めるところにする。

I 漢代の帶金具

a 長方形無鉤式鉤具

長方形板2枚を胸前であわせる金銀・金銅帶鉤具で、左右対称の瑞獸文様をそれぞれの板に鋳出す。ここでは向かって左向きに施文する板を鉤具aとし右向きに施文する板を鉤具bと呼ぶことにする。他方、2枚の鉤具のうち向かって左向きに文様をいれる板の短辺寄り中央に円孔を開くものと開かないものの違いがある。孫機はこの点に注目し鉤具を無穿孔帶頭と有穿孔帶頭に大別した。いずれにせよ鉤具の裏側に通した帶端ないしは帶紐を胸前で結んで上着を留めるとともに、下腹部を強調する装飾ポイントとして利用したのである(図1)。

文様をほどこした板状の鉤具は戦国時代の匈奴・東胡墓地からは数多く発見されており、なかでも金製の優品は中原の王室が胡族に賜った贈答品とされている。この種の帶が西漢王朝の服制に逆移入され、大・中型の西漢墓から金製・金銅製の優れた帶金具が出土している。

志賀和子は長方形牌型帶金具として分類する。徐州市獅子山西漢楚王陵からは優れた金製品の鉸具が発見されている(獅子山楚王陵考古発掘隊1998、鄒厚本ほか1998)。近藤喬一は獅子山の金製鉸具を中心に取り上げて、『漢書』匈奴伝にいう「黃金飾具帶」を「黃金飾貝帶」であると理解するが、鉸具とともに宝貝が帯を飾る部品であること、漢が匈奴と和親の贈答品として黄金帶扣と南海の宝貝を下賜したことを理由にあげている(近藤喬一2005)。

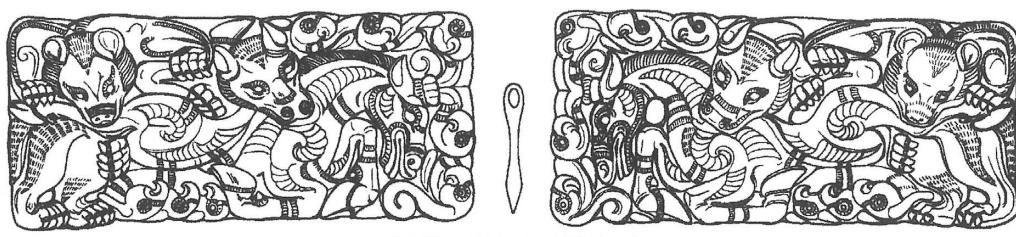
孫機はこれら匈奴・東胡の鉸具を解釈して、金製の優品が文献にいう「犀毗金頭」にあたるという。金を素材とするものを「金頭」といい普通の銅製品は「帶頭」というのであろう、とものべる。「犀毗」は形状もしくは機能に関する語であるが、実態は必ずしもはっきりしていない。犀毗について顏師古が「犀毗は胡帶の鉤なり。また鮮卑ともいう、また師比といい、総べて一物なり、語に輕重あるのみ」と説明しているように帶留めの鉸具であり、ほかに犀比・師比・私鉢・鮮卑などと記す文献もある。

b 馬蹄形打出鉸具

平面形を馬蹄形にかたどる金銀の板に瑞獸の文様を浮彫り風に鎧起、円弧形の縁に沿って縱長の三日月形の帶孔を開き、中央に可動式の鉤牙をとりつけた鉸具である。鉸具の板と別につくる鉤牙は漢代には鑄(ケツ)とよばれ、日本では刺金(サスガ)と呼び習わしている部品である。鑄の基部を孔縁に固定した軸棒に通して回転自在にして先端を孔の枠にあてて帶を留める。先に述べた長方形鉸具と異なり、向かって左向きに鑄と文様を配置する鉸具1枚だけで使用する。

東漢時代には金細工の製作技法が高度に発達し、帶金具でも複雑な瑞獸を絡ませて浮き彫り風の文様を鎧起し、さらに細金細工を駆使したり各種の宝石をちりばめた豪華な金銀製品のほか、玉製の鉸具も出現している。『後漢書』輿服志では「公・侯・將軍は紫綬……紫以上は綻(ゲキ、印の紐)と綬の間に玉鑄を施すを得」とか「黃金辟邪は、首に帶鑄を為り、飾るに白玉を以てす」と述べる鉸具は、まさにこのような玉・黃金製品をいうのであろう。金銀の板に文様を鎧起することによって鉸具に厚みを増して立体化をはかり、金粒の溶接によって文様に一層の起伏を持たせ、これに色とりどりの宝石を加えることによって莊嚴さを増強したのである(図2)。

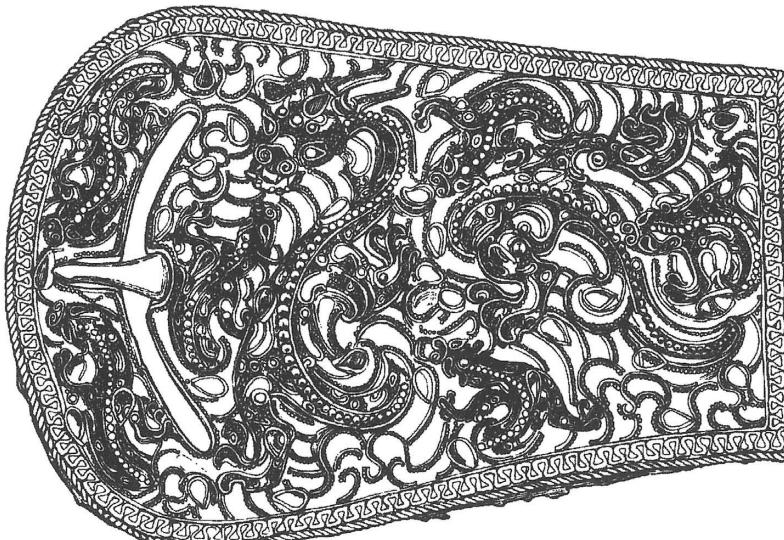
先の論文ではこの種の鉸具を文献にいう「金剛鮮卑綬帶」に比定し、出土地が漢代の植民地や属国に限られていることから、漢の皇帝が臣属する国王の身分を安んずる証として賜与したものと想定し、志賀和子もこの線に沿った考え方を示している。しかし、技術の粹を尽くし精製の極致に達した鉸具が内郡の湖南安鄉県黃山頭の劉弘墓から出土し、西晋における臣下の最高位を極めた諸王・封君などに賜与されているので(図2下、安鄉県文物管理所1993)、この種の腰帶が内郡の諸侯王に賜与された状況が東漢にまで遡る可能性が濃厚になった。



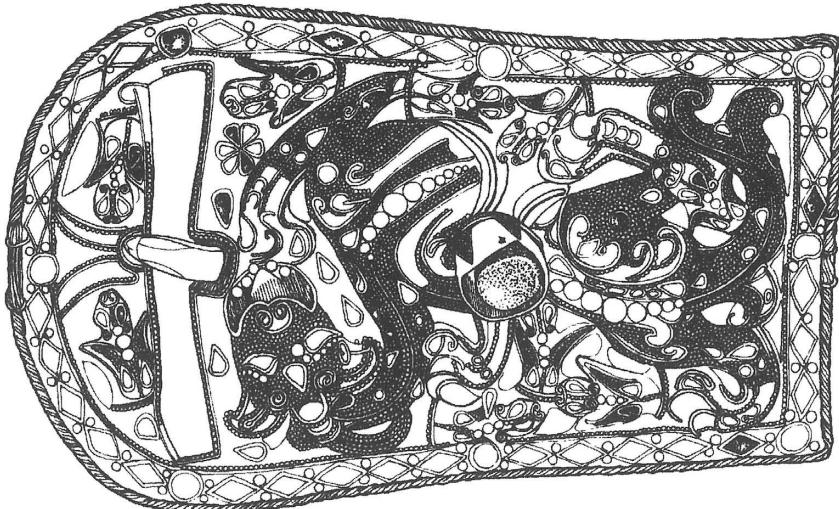
江蘇・獅子山西漢楚王陵

0 10cm

図1 長方形無鉤式鉸具



朝鮮・ピョンヤン石巖里M9



湖南・安鄉劉弘墓

0 5cm

図2 馬蹄形打出鉸具

II 漢式鉸具を匈奴式にアレンジした帶金具

a 長方形有鉤式鉸具

西漢・東漢時代に漢帝室から匈奴・東胡に贈与された帶金具、あるいはそれを模倣して北方民族が、自分たちの好みでアレンジして製作した帶金具がある。動物や人物の文様を透彫りした2枚1組の鉸具であり、鉸具aの内側中央に橢円形の孔をあけ、その前縁に鉤牙を鋳出す。この種の鉸具は東周時代の流れを汲み、西漢では内蒙古地方で発見される匈奴の帶金具に存在し長城以南に及んでいない。孫機は『説文』角部で「觽、環の舌あるもの、角に従ひ、覩の声。鑄、觽あるいは金・橘に従う」に段玉裁が「環中に横なる者有りて以て系を固めるものを謂う」と注していることに注目して、有穿孔帶頭をI・II・III・IV型に区分した。有穿孔帶頭の短辺に沿ってあけた帶孔の片側に鋳出した鉤牙を「觽」ないしは「鑄」に理解したのだが、この場合の鑄は固定したままで可動しない。

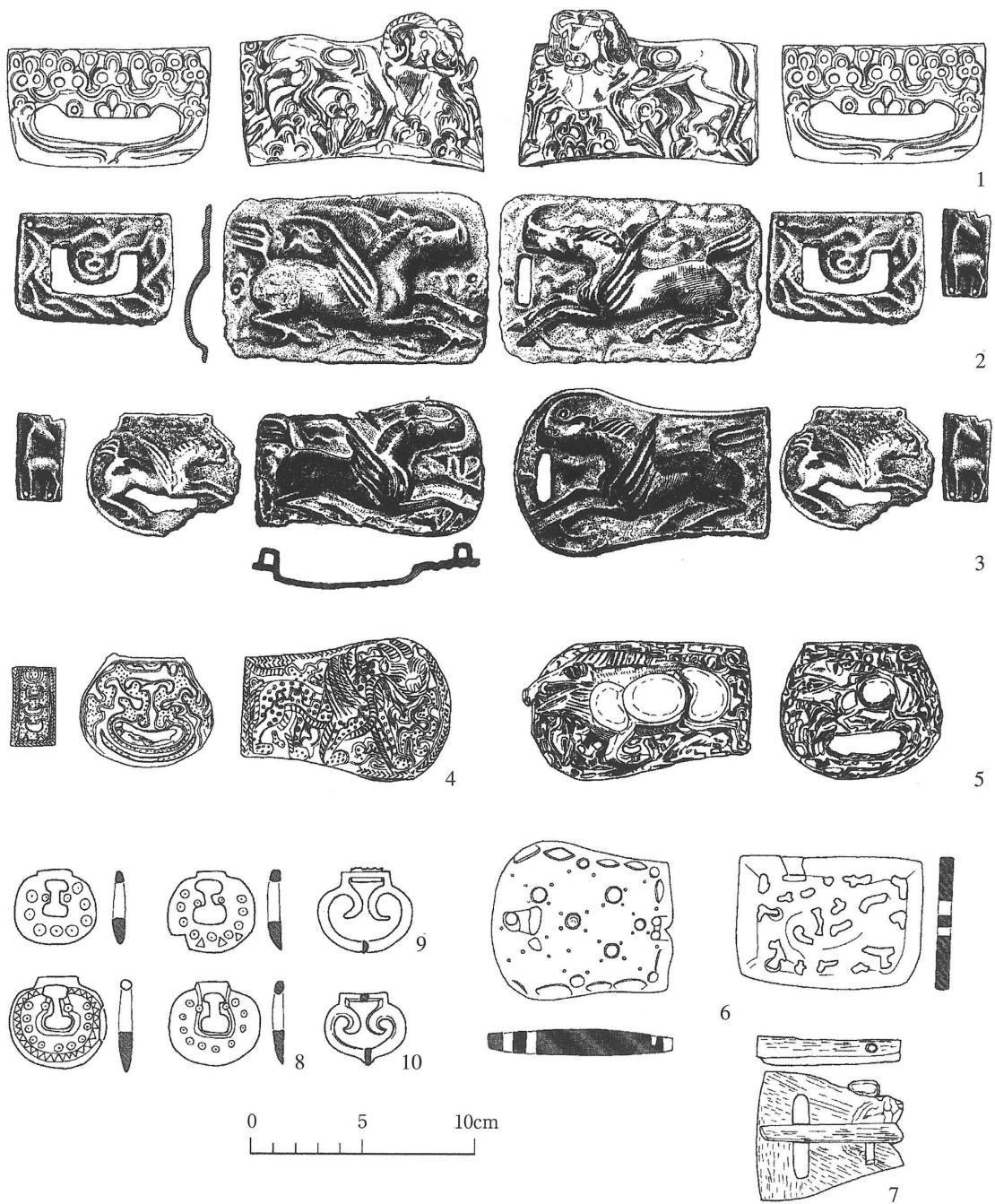
b 長方形無鉤式鉸具

内蒙古准格爾旗西溝畔の西漢墓M4の帶金具は、鉄芯に鍛起した金板を被せる包金の技法でつくる鉸具と銙板とが組み合わさる。鉸具は2枚1組で、ともに表面にうずくまる羊を鍛起で長方形板に浮彫り風に表現し周囲に植物文を飾り、裏面に鈕をつける。長さ11.7、幅7、高さ6cm。鉸具とともに遺体の腰部で出土した2枚の金具は、報告では帶金具の一種としか認識されなかつたが、孫機は長方形帶金具と組み合わせて帶に着装する銙板にあてた。鉄芯に鍛起した金板を被せる技法でつくり、2角を隅丸にする横長の長方形を呈し隅丸角の辺に沿つて幅広の弓形孔をあける。長さ9、幅5.3cm。2枚1組の長方形鉸具の型式をとりながら帶に銙板を装着している点が、西漢の長方形無鉤式鉸具と異なる。同時に発見された漢式佩玉の形式によって西漢初期の年代が与えられた(図3-1、伊克昭盟文物站・内蒙古文物工作隊1981)。

c 馬蹄形の鋳銅鉸具と打出し鉸具

内蒙古呼倫貝爾盟満州里市扎賚諾爾遺跡(鄭隆1961)、吉林省榆樹県老河深遺跡(吉林省文物考古研究所1987)中層の鮮卑墓地で発掘された墓主は、匈奴の冒頓に敗れ遠く北東の塞外に逃れこの土地に定住した鮮卑人に想定されている。鮮卑族の間でも漢式の帶金具が珍重されたようである。発見された帶金具は西漢で行われた穿孔のある金銅鉸具a・bを踏襲しており、羽根のある神獸を鋳出している。扎賚諾爾遺跡で発見された鉸具a・bはともに馬蹄形を呈する鋳造品である。詳細な報告がある老河深鮮卑墓地の例を詳しく見てみよう。

老河深鮮卑墓地は西漢末から東漢初期に形成されており、発見された腰金具は同時期に製作された金銀の漢製品を模倣したものである。伝統的な長方形無鉤式鉸具a・bを基本にしながら、新しい形態の帶にともなう馬蹄形打出鉸具を取り入れている(吉林省文物考古研究所



1. 内蒙古・西溝畔M4
2. 吉林・榆樹老河深M56
3. 吉林・榆樹老河深M105
4. 内蒙古・呼和浩特市土默特左旗
5. 内蒙古・烏蘭察布盟和林格爾
6. 内蒙古・扎賚諾爾M3012
7. 内蒙古・扎賚諾爾M1015
8. 内蒙古・察右后旗三道湾M102ほか
9. 内蒙古・額爾古納右旗拉布達林M24
10. 内蒙古・察右中旗七郎山Z Q20

図3 匈奴と東胡の帶金具

1987)。この墓地では西漢の鉸具と同じく長方形にかたどる鉸具と、東漢に流行した馬蹄形にかたどる金銅鉸具が出土している。M56の鉸具 a・b は、それぞれ長方形の板に羽根と犀角をつけた神獸を鋤出す。鉸具 a の短辺の前縁寄りに長方形の帶孔をあけるが、鉸具 b には孔がない。大きさはほぼ同じで長さ11.4、幅7.1cm。鉸具に方形の銙板2枚がともなう。横長の長方形を呈し、上辺に円孔3ヶをあけ両角を丸め下辺に沿って四字形の孔をあける。表面に絡み合った蔓草文を鋤出す。横幅6.6、縦長4.5cm。さらに小振りの飾り板が5枚加わる。縦長の長方形板に鹿の立像を鋤出す。長さ2.9、幅2cm(図3-2)。

老河深M105の鉸具 a・b は馬蹄形を呈しともに有翼有角の神獸を飾る。神獸が左を向く鉸具 a の前縁に沿って長楕円形の孔をあける。長さ11.2、幅6.3cm。帯に綴じつけた楕円形の銙板2枚がある。楕円形の上辺に長方形の突起をつくり出し円孔3ヶをあける。円弧形の下辺に沿って弧状の帶孔をあけ、この上部に鉸具 a と同じく羽ばたく神獸を浮彫り風に鋤出す。横幅6.6、縦長4.5cm。これに加えてM56と同形につくる鹿文の長方形飾り板3枚がある(図3-3)。

1本の帯に2枚着装する銙板にあけた横長の孔は、恐らく腰帯の左右に綴じつて刀子や砥石を吊り下げたのであろう。また鉸具を飾る龍文にかえて描く有翼有角の神獸は、拓跋鮮卑が塞外の深山渓谷から匈奴の故地に南下するときに神獸が先導したという伝説があり、神獸の姿は「その形馬に似て、その声は牛に類する」(『魏書』帝紀・序記)と伝えられているので、報告者は伝説の神獸を描いたものと考えている。あくまでも伝統的な帶金具に固執しているのである。このようにして、鮮卑の帶金具は北方民族の伝統に拘泥しながら自らデザインした固有の帶金具へと発展させたのである。

中原式の帶金具にこだわった鮮卑の帶金具もつくられた。1986年に発掘した扎賚諾爾M3012から、石炭と石製の帶具各1枚が発見されている(図3-6、内蒙古文物考古研究所1994)。石炭でつくる鉸具は馬蹄形にかたどり円頭部に留め孔2ヶをあけ上面に緑松石を象嵌する。長方形の石板は2隅をまるめ、内側に禽獸文らしい透彫りをほどこす。恐らく帯に綴じつけた銙板であろう。石製の鉸具と銙板は中原でつくられた金製の帶金具に準じるものであろうが、鑄(刺金)をつけないなど伝統に従っている面もある。東漢時代の鮮卑が回転する刺金に興味を持たなかったわけではない。同墓地M3015からは梯形の骨板の基部に刺金をとおす軸棒を取り付け、留め孔の縁に刺金の先端が当たるようにつくった鉸具が出土しているからである(図3-7、内蒙古文物考古研究所1994)。

内蒙古の中心部で発見され、北魏の鮮卑遺物として報告された鉄地金貼りの馬蹄形鉸具に対して、孫機は東漢・西晋代の馬蹄形打出鉸具との共通性を指摘して、東漢に遡らせた。志賀和子も孫機に賛成して上述の鮮卑が用いた馬蹄形の銅製鉸具とともに東漢に遡らせ、時期について彼女は前漢末～後漢前期と古く見ているが、匈奴の故地に南下した漢魏時代のものであろう。

内蒙古烏蘭察布盟和林格爾県另皮窖の墓で鉄地金貼りの帶金具4枚が出土している(図3-

5、内蒙古自治区博物館・和林格爾県文化館1984)。2枚は馬蹄形鉸具であり走行する猪を金板に浮彫り風に鎔起し、胴の中央に大きな紫色の玉、その左右に三日月形の白石を象嵌して、周囲にも緑松石を象嵌したが欠落している。長さ10.2、幅6.4cm。他の2枚は卵形の頂部を水平に切り取った形をとり、円弧をなす下辺に沿って長楕円形の孔をあける。上辺と孔の間に走行する猪を鎔起し、胴の中央に紫色の宝石をはめ周囲に緑松石をちりばめる。横幅9.6、縦の長さ6.3cm。前者が2枚1組の鉸具であり、後者が帯に取り付けた跨板である。

内蒙古呼和浩特市土默特左旗討合氣の墓から出土した帶金具も鉄地金貼りの帶金具で10枚出土している(図3-4、伊克堅・陸思賢1984)。2枚は馬蹄形打出鉸具a・bであり1本の角を頭上に生やし翼を広げて走行する鮮卑の神獸を鎔起している。長さ9.4、幅6.4cm。2枚は横長楕円形の上辺を水平にして円弧の下辺にそって三日月形の孔をあける跨板で、屈曲する雲文のような文様を打ち出している。横幅7.1、縦の長さ5.8cm。残りの6枚は長方形の飾り板で3ヶの火炎状文様を縦方向に並べる。長さ4.3、幅2.3cm。

うえの帶金具2例は東漢の馬蹄形打出鉸具を特徴づけている鎌(刺金)を装着していないが、複雑で立体的な鎔起文様と宝石の象嵌は東漢後半期の特徴をよく留めている。おそらく、勢力を増強した鮮卑が匈奴の故地に侵入し東漢と魏王朝と提携する東漢後半期の所産であろう。この見方からすると北方民族が古くからテーマとしてきた猪と鮮卑の神獸をぎこちない表現で描写した鉸具こそ、鮮卑自らが創作した新式の帶金具といえよう。華北で勢力を伸張する鮮卑を統率したのが檀石槐であるが、かれは漢王朝からの懷柔策を無視して、漢の辺疆をしばしば侵寇した。こうした鮮卑優勢の状況は三国・西晋の時代になってもとどまらなかった。

III 西晋式帶金具の出現

以前に発表した筆者の論文では中国の西晋代以降5・6世紀までの帶金具を一まとめにしてI～IIIに大別した。しかし、それでは系統を異にする帶金具を同列に論じることになるので、小論では中国王朝が製作した帶金具Iを「西晋式帶金具」とよび、それを特徴づける鉸具の形を「U字形透彫鉸具」として取り上げる。このようにして、後に中国東北部から朝鮮・日本に広く展開する一般的な帶金具と区別する。U字形鉸具というのは馬蹄形鉸具に対するいい方で、鉸具の前縁部が隅丸U字形を示すことからの命名である。

西晋式帶金具は、鉸具・跨板・蛇尾の部品で構成し、いずれの部品も透彫り・毛彫りと鍛留めの技法でつくり金鍍金をほどこした金銅製品である。以前に発表した論文では鉸具と対置して帶端につける金具を蛇尾とし、鉸具をくぐり帶の最先端につける金具を帶先金具としたが、孫機の提案に従って改める。すなわち長方形鉸具に準じて蛇尾を鉸具b、帶先金具を蛇尾に変更する。金具の裏面に帶本体の痕跡が残る例があり、帶本体が皮製でなく布製であ

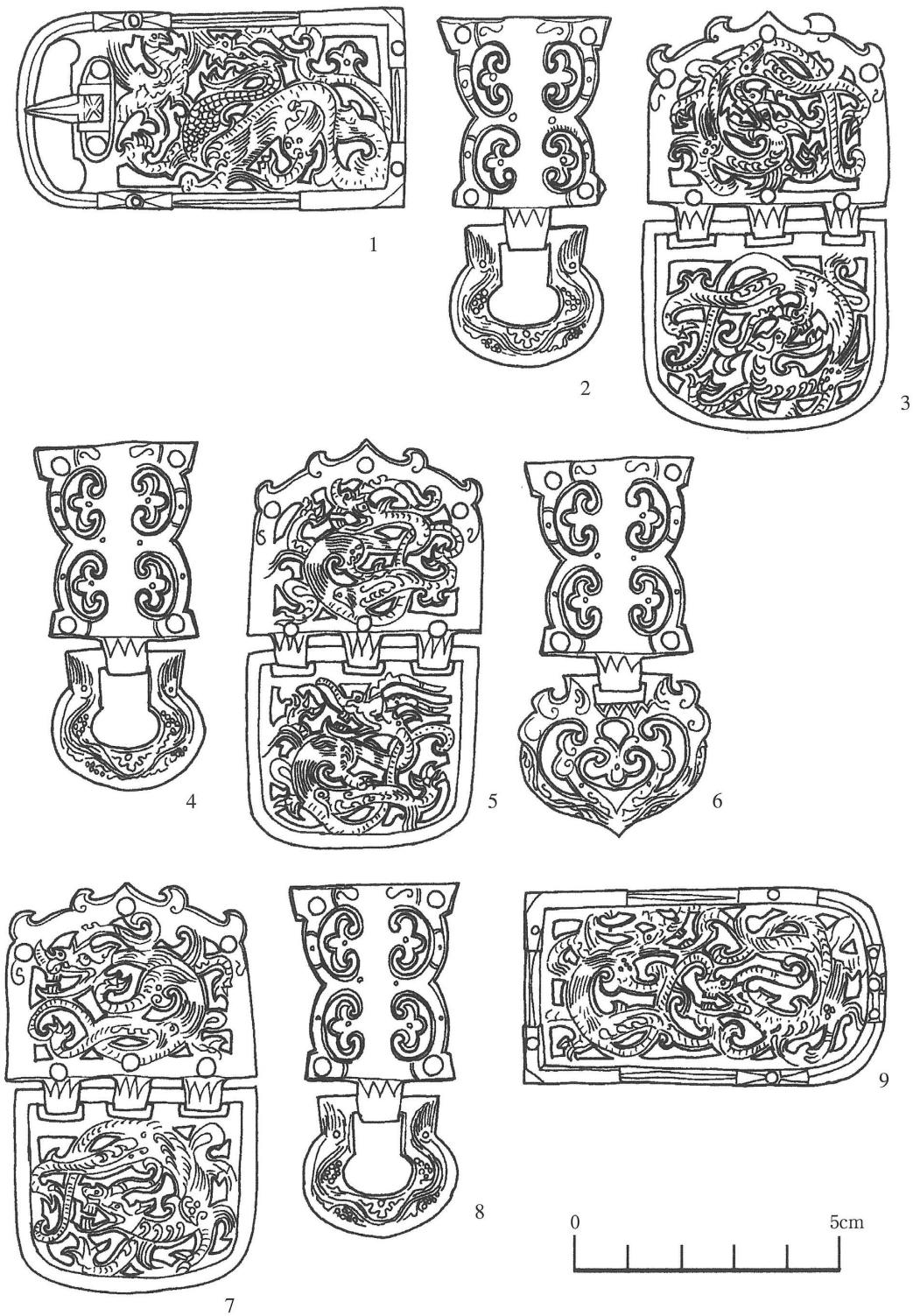
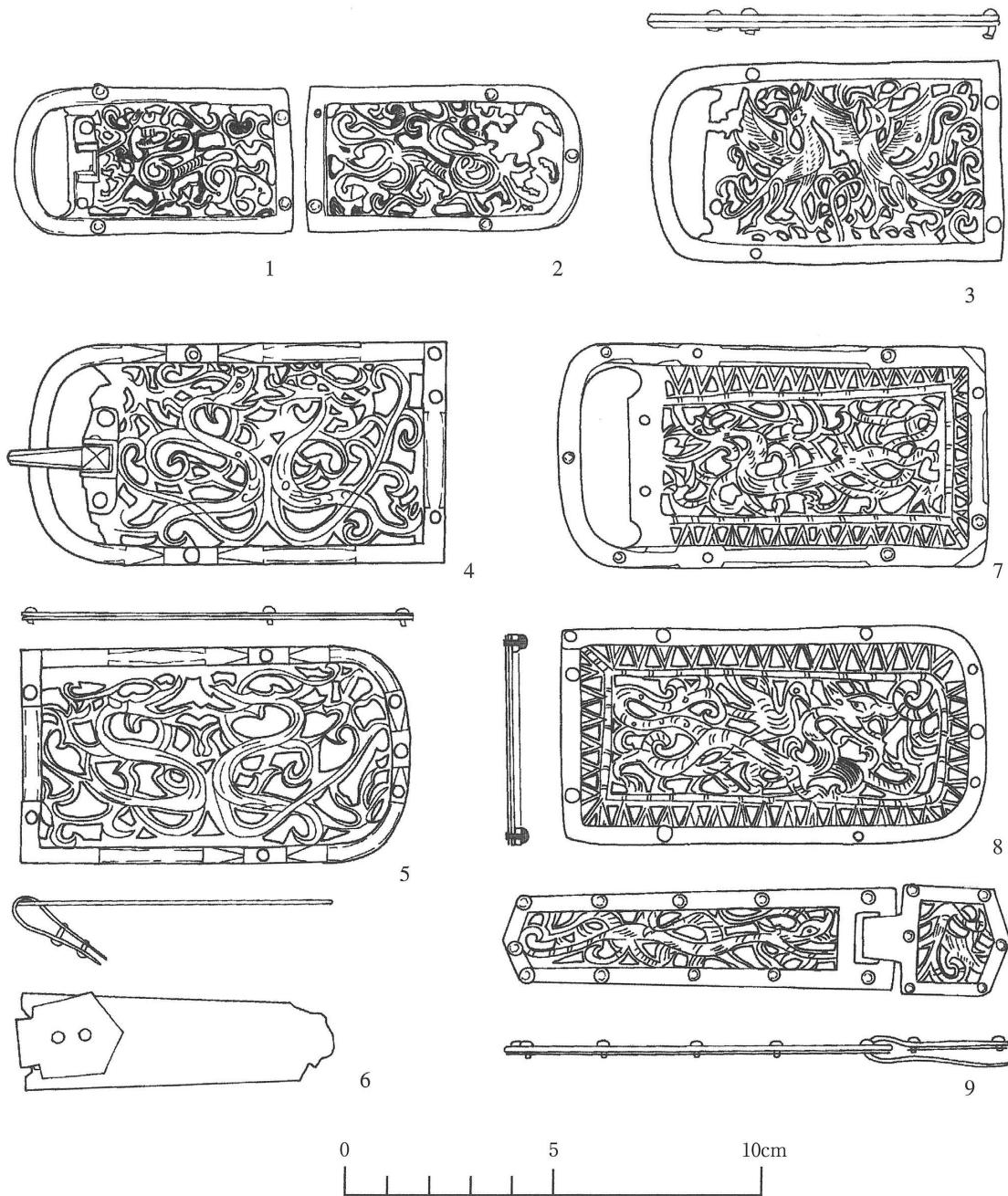


図4 北票喇嘛洞II M275出土の西晋式A型透彫帶金具



1・2. 北票喇嘛洞II M101 3. 朝陽十二台88M1 4~6. 朝陽袁台子壁画墓
7~9. 朝陽奉車都尉墓

図5 西晋式B型透彫帶金具

ったことがわかっている。こうした西晋式帶金具が3世紀頃から遼西へ進出した慕容部鮮卑墓地から発見されるのだが、中国内郡すなわち西晋王朝での製作が想定できるものと、それを真似て慕容鮮卑が製作した亜式の西晋式帶金具が存在している。ここでは真正の西晋式帶金具をA型、模倣の西晋式帶金具をB型と呼ぶ。

a 西晋式A型帶金具の形成

北票喇嘛洞墓地ⅡM275から出土した西晋式A型帶金具について、次のような主旨の説明がなされている(遼寧省文物考古研究所2002、遼寧省文物考古研究所ほか2004)。

帶金具は鉸具a・b各1点と形が異なる7点の銙板、計9枚で構成する。鉸具aは前縁が丸く後縁が方の矩形で、表面に一龍一鳳を透彫して、「龍鳳対戦」図を表す(図4-1)。前端に帶孔・軸・鏑をそなえ、周縁には枠を重ね、上から5本の鉢でとめる。長さ7.3cm、幅3.6cm、縁厚0.3cm。鉸具bの形状は鉸具aと同じであるが帶孔と鏑ではなく、表面に双龍が戯れる図案を透彫りし、周囲の枠に7本の鉢を打つ。長さ6.8cm、幅3.6cm(図4-9)。銙板は3種に分かれる。第1種は3点でやや大きく、銙板・垂飾とも矩形に近く、それぞれにとぐろを巻く1匹の龍文を透彫りし、銙板は花弁にかたどり上辺中央を尖らし左右に爪形の突起を添える。下辺に2枚の舌をつくり出し垂飾の針金枠にとおし軸管に可動式で連結する(図4-3・5・7)。銙板の上下にそれぞれ3本の鉢を打つ。長さ4.6cm、幅4.2cm。垂飾は下縁が円弧をなし、周縁に枠を重ねる。長さ4.4cm、幅3.6cm。第2種3点はやや小さく、銙板は長方形に近く、表面に4個の三葉文を対称的に透彫りし、四隅を鉢で帶本体に留める。銙の下辺に舌をつくり垂飾の上辺にとおしてつなぐ(図4-2・4・8)。長さ3.6cm、幅3.1cm。垂飾は凸字形に近い環形垂飾で、環には円珠文と多重曲線文からなる複合文様を鑿で刻む。長さ2.9cm、幅2.9cm、厚さ0.25cm。第3種は1点のみで、銙板は第2種の銙板とつくりと文様が同じである(図4-6)。垂飾は逆ハート形に切り抜き上辺を方形に残し銙の舌をとおす長方形の孔をあける。長方形孔の下に外縁と相似形のハート形を切り抜いて飾る。長さ3.5cm、幅3.2cm。

U字形鉸具にはこれまでの鉸具とは大きく異なるところがある。構造の面では、長方形無鉤式鉸具以来行われてきた鉸具a・bの2枚を1組にする鉸具であり、鉸具aに鏑つまり刺金をつけ、多種類の垂飾付き銙板を装着する点が特色となる。製作技法では、銅板を透彫りして鑿で文様の細部を刻み、金銀製品ではなく金銅製品である点が特徴となる。馬蹄形打出鉸具にくらべて製作を簡略にし、鏑などの要素を加味する一方、2枚1組の鉸具など鮮卑帶金具の伝統性を忠実に残している。とはいっても、金銀の板金を鎚起して模様を立体的に表し宝石を象嵌して豪華につくる馬蹄形打出鉸具にくらべると、金銅製のU字形透彫鉸具は製作に手間のかからない工芸品といえよう。文様の構図が伝統的な中原式であり瑞祥の龍文の表現も漢の方式を踏襲しているので、西晋王室の工房で製作された可能性を否定できない。銙板と

数々の垂飾を加えるなど、そこから鮮卑の好みにおもねる様子がありありと読み取れるのである。

同類の晋式A型帶金具は洛陽24号西晋墓、宜興周廻墓、日本の新山古墳などから出土しており、幾つかの伝世品が各地の博物館などに収蔵されている。それらを参考にすると、鉸具bの端に着装して鉸具aの帶孔を潜る蛇尾を欠いてはいるが、喇嘛洞II M275の帶金具は銙板を完全に留めている。その「龍鳳対戦」の鉸具aと鉸具bの透彫文様が、日本の出光美術館が所蔵する帶金具と酷似している点は注目すべきである。先に述べたようにこの種の帶金具は軍服にともなう帶に着装して、將軍の任用などに際して衣服とともに西晋王室から内外の臣下に賜与したものである。

腰回りの帶にぶら下げる部品を蹀躞(ショウショウ、帶本体に垂下する飾り)ということから、孫機は垂飾環をつける帶を蹀躞帶と呼んだ。これは宋の沈括『夢溪筆談』卷1で、劍・幘帨(ハンケチ)・鞶囊・刀砺などを帶から垂下する環が「蹀躞」であり、唐宋時代には銙と呼ばれるという説によっている。そして、孫機は同形式の銙が東漢時代に出現し西晋時代に広く行われるようになった、という意見も付け加えている。

上海博物館が所蔵する透彫り玉製の帶具は、孫機が想定したように西晋式A型帶金具の鉸具bである。

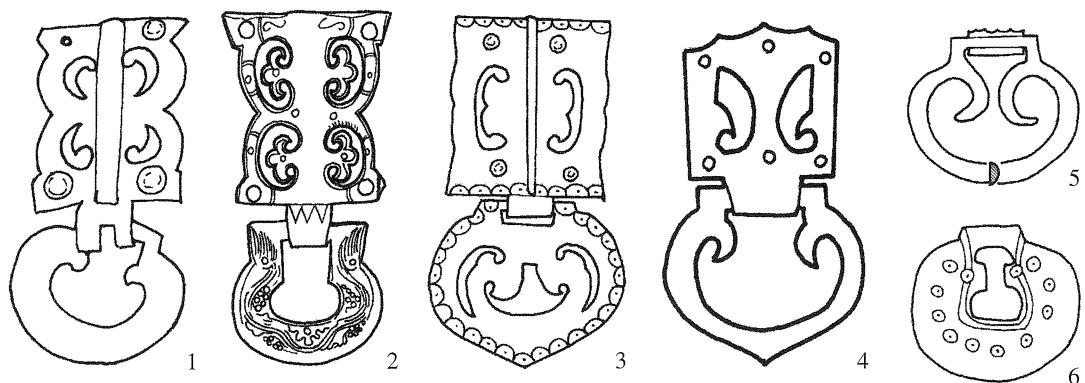
この玉具に「□庚午、御府造白玉袞帶鮮卑頭、其年十二月丙辰、用工七百」「□將臣范許、奉車都尉臣程涇、令奉都尉閔内侯臣張余」という銘文が刻まれている。玉具の前頭部が欠損しており銘文の上部が不明であり、庚午の干支を何時にあてるかが問題となる。王正書の報告では「庚午」の年に「十二月丙辰日」と記す年としては、西晋の永嘉4年(311年)と東晋の太和5年(371年)があるといい、いずれをとるかは難しいという。すでに知られている諸例が西晋時代につくられているので、三国時代に遡る可能性があっても東晋時代に下がる可能性は少なく永嘉4年(311年)にあてるのが至当であろう。なお、欠損部分に記していたであろう最高責任者である范許の職は「督攝齒簿典兵中郎将」と推測された。このようにして、玉製鉸具が西晋王室の儀典を司る官司でつくられ、この種の帶具を「袞帶鮮卑頭」とよび、緹帶(布帶)の先につけたことがわかる(王正書1999)。

漢代に行われた帶に対して後世の人が注釈するとき「鮮卑緹帶」など、鮮卑の語がしばしば用いられる帶とは、鮮卑の好みを大胆に取り入れたU字形透彫鉸具と垂飾付き銙板を装着する西晋式A型帶であり、西漢後半から東漢にかけて行われた馬蹄形打出鉸具を装着した帶ではない。くりかえしていうが、晋式A型帶金具には、東漢時代に鮮卑が呼倫貝爾市を中心とする地方でいたころにつくられた有翼有角の神獸をモチーフとした2枚1組の鉸具a・bと銙板をつけた帶、あるいは呼和浩特市を中心とする地方に南下して豪華な東漢の馬蹄形打出鉸具を模倣しながらも鉄地金貼りの鉸具a・bを製作した鮮卑のこだわりが結集しているのである。うがった見方からすると、西晋王室が鮮卑を懐柔するために鮮卑に迎合して設

計し製作した新製品だったのである。

湖南省に築造されている西晋の劉弘墓に副葬する帶金具が東漢式の馬蹄形打出鉢具にあたることからすると、西晋時代には馬蹄形打出鉢具とU字形透彫鉢具とが同時平行で行われていたことになる。精巧な技法で豪華な金細工の装飾を駆使して製作した馬蹄形打出鉢具は、宣成公に封ぜられ、新城郡公を贈られ、荊州刺史、侍中、鎮南大将军、開儀同三司、車騎将军などを歴任した「最高位の高官を経た劉弘持つのにふさわしい装身具といえよう(図2下)。これに対して元康6年(297年)に戦没して翌年に埋葬された周處は、建威将军を拝命して夏侯駿に従って羌を伐つが戦死し、死後に平西将军を贈られている。前後左右四将軍は上卿に位する高級武官だが、彼が所持するのは製作が簡略な金銅製のU字形透彫鉢具であり、臣下として最高位を極めた宣成公・鎮南大将军の持ち物にくらべて格式が劣ることを目に見える形で示している。

西晋式A型带金具が、何時・何処で・どのようにして始まったか、この課題に対する解答はいまのところ手詰まり状態である。しかし、手掛かりが全く存在しないわけではない。河北省定県M43の墓主は東漢時代にこの地域を支配した中山国王劉暢の王陵に比定され、熹平3年(174年)に没したと伝えられている(定県博物館1973)。彼の墓は大型の磚室墓であり、例外なく徹底的に盗掘されていたが、幸うじて残されていた副葬品の中に銀製の鎔板がある(図6-1)。報告では説明がなく写真しか掲載されていないが、北票喇嘛洞II M275の第2種鎔板に類する形である(図4-2)。しかし、鎔板に透彫りする文様は4単位の三葉文ではなく、小さな木葉4枚が四方にのびる形にも見える。また垂飾の遊環では基部の方形に移行するところに爪形の突起をつくる。この例よりも喇嘛洞II M196から出土した鎔板のほうが定県M43の鎔板に類似しており、鎔板内に透彫りする木葉は中心軸を境にして左右対称に透彫りする2葉である(図6-3)。仮に2葉の間を外縁と結ぶと定県M43の鎔板と同じ構図の文様になる。



1. 河北定県M43 2. 遼寧北票喇嘛洞II M275 3. 喇嘛洞II M196 4. 朝陽王子墳山腰而宮子M9001
5. 内蒙古額爾古納右旗拉布達林M24 6. 内蒙古察右后旗三道湾

図6 各種の鎔板

銙板に垂下する遊環は喇嘛洞ⅡM196の場合は喇嘛洞ⅡM275と同様につくり、定県M43例の形をとらない。朝陽王子墳山腰而宮子M9001の銙板に垂下する遊環の形が定県M43に似ている(図6-4、遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館1997a)。

定県M43の銙板に組み合わさる遊環に似た遺物が、内蒙古の鮮卑墓で発見されている。額爾古納右旗拉布達林M24や察右中旗七郎山墓地OQM20から出土した銅製品がそれである(図6-5)。拉布達林M24の例をとりあげると、玦状環の両端を内に大きく巻き込みその上辺に方形の枠を付け加えた形をとり、上辺の枠には皮片が付着しているというので、帶に垂下した遊環のようである。大きさは上下の長さ3.3、幅3.8cmである(内蒙古文物考古研究所・呼倫貝爾盟文物管理站ほか1994、王新宇・魏堅2004)。発掘報告では七郎山墓地を4世紀末から5世紀初頭に形成された拓跋鮮卑の墓地とするが、定県M43との関係からすれば漢魏時代に遡る可能性を考慮しなければならない。

内蒙古烏蘭察布盟察右旗三道湾墓地は、匈奴の故地に鮮卑が定住し始めた遺跡に想定されている。前後2期にわかれ、第1期は東漢後期から三国時代にかけて営まれた墓地であるという。この第1期の墓地M102から環形骨製品11枚が出土している。環飾りは文様によって4式に分けられているが、基本的には直径3.3~4cmの円形に加工した骨板の上辺に低い方形突出部を残し、内に工字形の孔を開く形である。刻線文様は輪のなかに刺突点がある円形文を並べたり、周囲に三角文や鋸歯文を加えている。帯に装着した紐などを骨板上辺の孔にとおして垂下したのであろうが、この墓では鉸具が出土していない(図3-8・6-6、烏蘭察布博物館1994)。こうした骨製の遊環が銅製品の原型になった可能性も想定できるが、定県M43の銙板を重視すると銅製品を模倣して骨製品が製作されたと考えるべきである。

河北定県M43と内蒙古の鮮卑墓から発見される上記の銙板が、馬蹄形打出鉸具にともなうものかU字形透彫鉸具にともなうものかは明かでない。西晋の馬蹄形打出鉸具がもつ格式を考えると定県M43は封君の王陵だから馬蹄形打出鉸具となり、透彫りの銙板を重視すると西晋のU字形透彫鉸具となる。いずれをとるかは将来の課題にせざるを得ないが、西晋式A型帶金具の出現が魏晋時代まで遡る可能性がでてきたことは注目すべきである。

b 西晋式B型帶金具の形成

西晋式B型帶金具は西晋式A型帶金具に比べて一回り大きくつくられ、金具の文様表現がおおらかで、形にこだわらない多様な構図で透彫りしている。このことから、西晋式A型帶金具とは製作地と製作工人が異なるのではないかと想定し、鮮卑が支配する領域内で製作されたものと考えた。西晋式B型帶金具の構造を知るため、代表例として朝陽市で調査された前燕奉車都尉墓の帶金具を取り上げる。

朝陽市の郊外で自宅の土取り中に石槨墓が農民によって発掘された。墓は塊石を積み上げ板石で蓋する堅穴式石槨墓であり、長さ2.6m、幅1m内外、高さ1m内外の比較的小さな

墓である。副葬品はすでに取り上げられていたが、奉車都尉銀印、銅帶鉤、龍文象嵌銅鉸具、金銅透彫り帶金具、銀釵状品、鉄棺釦類が出土した。銀印に刻する「奉車都尉」の検討によって359年前後の埋葬年代が想定されている(田立坤1994)。報告にしたがって帶金具を見てみよう(図5-7~9)。

透彫帶金具はいずれも金銅製品で3枚あり、うち2枚が鉸具a・bである。鉸具aは長さ10.3、幅5.4cmで、前縁を隅丸方形とし後縁は方形とする。製法は先ず長方形の銅板の前縁を隅丸にかたどり、前端に沿って長細い帶孔をあけ、表面に鍍金する。帶孔の後方に1匹の龍を透彫して周囲に鋸歯文帯を加えるが、文様を表現する刻線は鑿で刻んだ楔形列点の連続である。龍文と鋸歯文を透彫りした銅板の上から銅線の枠金を重ね裏面に銅の薄板をあてがう。縁枠と文様板・薄板を鉢で留める。鏽(刺金)は失われ固定した鉢孔だけが残る。鉸具bの製法と形状は先の鉸具aと同じだが、帶孔をあけていない。中央に1匹の虎を飾り、虎の背に1羽の鳥がとまり、製法も先の鉸具aと同である。蛇尾は大小2ヶの部品をつなぎ、大きい方に龍文、小さい方に鳥文を飾る。上方に位置する鳥文板は折り曲げて2枚重ねとし、折り曲げ部の幅を狭めて龍文板の基部にあけた長方形の孔に通して連結する。鳥板には鉸具bにとりつけて鏽(刺金)を通して帶を締める布ないしは皮の細帯の端を挟む。

報告を補いながら奉車都尉墓の帶金具を紹介したが、この例では跨板をともなっていないこと、喇嘛洞II M275の鉸具と比べると約1.5倍に拡大していること、龍虎の文様表現に厳しさがなくユーモラスに見えることなどを特長としてあげることが出来る。要するに金具を装着した綱帯を大きく見せるのが目的であり、そのため竜虎の胴体を伸ばし周囲に三角文帯を加えることによって綱帯の両端につける鉸具を大きくするのである。

同時に発見された龍文象嵌銅鉸具は、製作は精巧だが、金具に着装できる帯幅が約1.5cmにとどまることから腰帯を想定できない。銅帶鉤はこの時期になると出土例が極端に少なくなり、減少するとともに定型化している。実用品でなく儀礼品であろうが、本来は漢人の服飾に着装したものである。銀印と綬にともなう鮮卑人の正装でU字形透彫鉸具をそなえた西晋式B型帶金具を締めたのであろう。

うえに見てきたような帶金具は、河北・遼西・遼東地方にとどまり鮮卑に仕えた漢人(西晋遺民)の手になるものであり、馬具・簾をはじめとする金工品と共に通した技法で製作されている。慕容皝が前燕を建国し龍城(今の朝陽市)に都する晋建興4年(316年)前後からのことであろうが、喇嘛洞墓地の墓で西晋式A型帶金具が出土している点に注目せねばならない。というのは、この墓地から西晋式A型帶金具とともに、模倣第1号ともいべき西晋式B型帶金具が出土しているからである。模倣の第1歩は喇嘛洞II M101の鉸具から始まる。

北票喇嘛洞II M101の鉸具aには龍と鳥が戯れる文様を透彫りして、鉸具bには1匹の龍を透彫りする。鉸具2枚の大きさと文様構成は喇嘛洞II M275のそれと全く同じであるといえるほど類似している。長さ6.6、幅3.5cm。しかし、よく見るとII M101の文様は省略が著

しく動物の表現が稚拙で硬化している。硬直した輪郭を透彫りする施文は同時に出土した金銅製鞍金具の文様と共通しており、両者がセットとして同じ工房で製作された可能性を示唆している(図5-1・2、遼寧省文物考古研究所ほか2004)。

喇嘛洞II M266からは鉄地に金被せの西晋式A型帶金具が出土している。鉄製の西晋式A型帶金具は珍しく他に例を見ない。鉸具a・b 2枚、第1種鎊板5枚、第2・3種鎊板6枚で構成されている。全面が鉄鑄に覆われているので文様など詳細は不明であるが、鉸具a・b 2枚の大きさが長さ6.6、幅3.8cmであることから考えると、喇嘛洞II M275の金銅帶金具と同じく西晋王室で製作された可能性がある。一方、匈奴・東胡が古くから製作してきた鉄地金貼りの製品であることは、在地で製作されたことを物語る。この墓でも鉄製透彫鞍金具があり、金銅製品と同様の透彫文様を飾っているので、帶金具と馬具をセットにして在地で製作された西晋式B型帶金具である可能性が強くなる(遼寧省文物考古研究所ほか2004)。

朝陽十二台郷磚廠88M1の金銅鉸具a・bは喇嘛洞II M101の鉸具よりも一回り大きく、長さ8.6、幅4.8cmである(図5-3、遼寧省文物考古研究所ほか1997b)。鉸具a・bとともに2羽の鳳鳥が向かい合う姿を透彫りしており、西晋式A型帶金具には見られない構図である。この場合も鉸具の文様と構図が金銅製鞍金具と共通しており、鞍金具では前輪と後輪の中心文様に対峙する2羽の鳳鳥を配置している。

朝陽袁台子壁画墓では鉸具2枚と蛇尾1枚が出土している(図5-4～6、遼寧省博物館文物隊ほか1984)。鉸具a・bは銀製の枠に透彫りした金銅板を鋲留めしたもので、文様は2枚とも双龍が向かい合う姿である。やはり西晋式A型帶金具には見られない構図である。一段と大きくなり、長さ9.4、幅4.8cmである。双龍がさらに大きく成長していることはいうまでもない。この墓では木芯皮貼りで鞍橋がつくられており、文様は不明である。

袁台子壁画墓の鉸具に次ぐ大型の鉸具が、冒頭に紹介した朝陽奉車都尉墓の鉸具であり、長さ10.3、幅5.4cmである(図5-7～9)。

西晋B式帶金具は喇嘛洞II M101から奉車都尉墓までの間に以上のような変化がみとめられる。鉸具の変遷は、晋建興4年(316年)の西晋滅亡によって西晋王室から下賜された西晋式A型帶金具の供給が途絶え、慕容鮮卑が独自に製作を始めてから奉車都尉墓の推定年代359年頃まで、約40年余り間に生じた現象である。西晋B式帶金具は、その後前燕が滅びる太和5年(370年)まで後10年ほど続くのであろう。鉸具の文様と構造が鞍金具と同調して変化する状況は前燕の領域内だけに見られる現象であり、馬具もまた官位・職掌の昇格にともなって燕王から下賜された可能性を示唆している。

IV まとめ

西漢時代に匈奴・東胡への贈答品として製作され、北方民族の間で珍重された金製・金銅

製の帶金具は2枚1組で用いる鋳造製の長方形鉸具を特徴とする。この種帶金具は西漢の諸侯王陵からも少なからず発見され、漢帝国の官位・身分階層を視覚的に表現する服飾具としても発達した。西漢後半から帶留めに鐫(刺金)をつけた鉸具1枚の馬蹄形打出鉸具が出現して、東漢時代にさらに発展した。漠北に居住していた鮮卑の間に長方形鋳造鉸具や馬蹄形打出鉸具がつたえられ、東漢時代には鋳造製の馬蹄形鉸具など鮮卑独自の帶金具を生み出した。

鮮卑が力を増し南下し匈奴の故地を占拠する東漢時代後半になると、長方形鋳造鉸具と馬蹄形打出鉸具を折衷し、2枚1組の鉸具で構成するU字形透彫鉸具が出現した。小論で西晋式A型帶金具とした帶金具であり、それを鮮卑自らが改良したのが西晋式B型帶金具である。

鮮卑の帶金具は以上述べてきた西晋A式帶金具と西晋B式帶金具だけでなく、北方民族特有の帶金具も所持している。小論で比較のために取り上げた北票喇嘛洞II M196の帶金具もその1例であるが、それらについては別の観点から論じねばならないので、ここでは取り上げなかった。小論で述べてきた帶金具を簡単にまとめると以下のようになる。

繰り返すが、鮮卑の帶金具は西漢時代に匈奴との交流過程で成立し、両国内における官位や身分を象徴する服飾具として発達し、珍重された。西漢から東漢前半まで匈奴と朝貢関係を継続した証として帶金具が存在しているのである。東漢後半以降になると、塞外の主人公が匈奴から烏丸・鮮卑に代わり、帶金具の呼び方も「黄金師比」などのから「鮮卑綻帶」へと変化する。西晋の滅亡によって漢人と胡人の間に介在した帶金具の意味は消滅するが、燕国を僭称した慕容鮮卑の国内では西晋A式帶金具の意義がなお受け継がれた。すなわち、漢王朝を屈服させた自信を背景にして自ら西晋式B型帶金具を創作する一方、騎馬民族の至宝ともいえる馬具をくわえて官制にともなう服飾具として制度化するのであろう。論及していないが、鞍金具の形式変化も帶金具と相乗しているように思える。

蛇 足

高句麗墓からも西晋式A型帶金具を模倣した金具がつくられている（集安県文物保管所1983）。吉林省集安で1979年に調査した高句麗墓M159で発見された金銅鉸具a・bは前燕の西晋B式帶金具とはかなり異なり、金銅板が薄く鑿彫りも浅いようである。同年に発掘したM152から金銅鎊板1枚が出土している。写真・挿図からすると西晋式A型帶金具の鎊板に極めて似ており、西晋から下賜されたものかもしれない。日本の兵庫県行者塚古墳から出土した西晋式帶金具は鉸具a・bに2種の鎊板をともなうが、鉸具に透彫りする龍の表現に崩れが見られるので西晋式A型帶金具ではない。また龍の描写は前燕で製作したであろう西晋式B型帶金具とも異なる。高句麗と同じく別ルート、例えば百濟の製品であろうか。

日本の新山古墳から出土した帶金具は西晋式A型帶金具であり、西晋B式帶金具ではない。このことは倭が西晋に貢献した晋泰始2年(266年)から西晋が滅亡する316年まで、約50年の間に西晋の王室から倭国に下賜されたものであることが確実となる。

北票喇嘛洞墓地から出土した帶金具を検討しながら、8年前の研究旅行が走馬燈のようによみがえった。1997年3月の寒い日、田中琢所長をはじめとする奈良国立文化財研究所の一一行は発掘間もない喇嘛洞鮮卑墓地を訪れ、急峻な斜面に累々と掘られた堅穴式土坑墓に驚き、かつ興奮した。瀋陽と朝陽で見た鞍金具・馬甲をはじめとする優れた副葬品の出処を確認したわけである。そのとき、私たちを親切に案内していただいた故張克挙さんにこやかな笑顔が今も忘れられない。朝陽博物館で出土遺物を詳しく説明していただいた田立坤さん、私たちの希望を辛抱強く聞いていただき、両研究所の共同研究をスムースに導いてくれた前所長の辛占山さん達の立振舞が瞼に浮かぶ。その後に進展した実り多い共同研究の成果があの時に始まったことを考えると、感慨に堪えない。

引用文献

〔論文〕

志賀和子 1985「中国およびその周辺地域における帶金具」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ 京都

町田章 1987「古代帶金具考」『東アジアの装飾墓』所収 同朋舎出版 京都、初出は『考古学雑誌』第56巻第1号 1970年

田広金・郭素新編 1986『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社 北京

町田章 1987「匈奴式帶金具の変遷」『東アジアの装飾墓』所収 同朋舎 京都、初出は『末永先生米寿記念献呈論文集』坤 1985年

田立坤 1996「論帶扣的形式及演變」『遼寧文物学刊』1996年第1期

王正書 1999「上博玉雕精品鮮卑頭銘文補釈」『文物』1999年第4期

孫機 2001「中国古代の帶具」『増訂本 中国古輿服論叢』所収 文物出版社 北京、初出は「先秦・漢・晋腰帶用金銀帶扣」『文物』1994年第1期

志賀和子 2002「漢代北方系帶金具の変遷」『中国考古学』第2号 東京

近藤喬一 2005「獅子山楚王陵出土黃金飾貝帶をめぐって」『アジアの歴史と文化』第9輯 山口

〔発掘調査報告〕

鄭隆 1961「内蒙古扎赉諾爾古墓群調査記」『文物』1961年第9期

定県博物館 1973「河北定県M43号漢墓発掘報告」『文物』1973年第11期

伊克昭盟文物站・内蒙古文物工作隊 1981「西溝畔匈奴墓地調査記」『内蒙古文物考古』創刊号

集安県文物保管所 1983「集安高句麗墓葬発掘簡報」『考古』1983年第4期

内蒙古自治区博物館・和林格爾県文化館 1984「和林格爾県另皮窖村北魏墓出土の金器」『内蒙古文物考古』第3期

伊克堅・陸思賢 1984「土默特左旗出土北魏時期文物」『内蒙古文物考古』第3期

遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽県文化館 1984「朝陽袁台子東晋壁画墓」『文物』

1984年第6期

吉林省文物考古研究所 1987『榆樹老河深』文物出版社 北京
安鄉県文物管理所 1993「湖南安鄉西晉劉弘墓」『文物』1993年第11期
内蒙古文物考古研究所 1994「扎賚諾爾古墓群1986年清理發掘報告」『内蒙古文物考古文集』第1輯
北京
烏蘭察布博物館 1994「察右后旗三道湾墓地」『内蒙古文物考古文集』第1輯 北京
内蒙古文物考古研究所・呼倫貝爾盟文物管理站・額爾古納右旗文物管理所 1994「額爾古納右旗拉布達
林鮮卑墓群發掘簡報」『内蒙古文物考古文集』第1輯 北京
田立坤 1994「朝陽前燕奉車都尉墓」『文物』1994年第11期
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽王子墳山墓群 1987・1990年度考古發掘的主要收穫」
『文物』1997年第11期(遼寧省文物考古研究所 朝陽市博物館1997a)
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽十二台鄉磚廠88M1發掘簡報」『文物』1997年第11期
(遼寧省文物考古研究所 朝陽市博物館1997b)
獅子山楚王陵考古發掘隊 1998「徐州獅子山西漢楚王陵發掘簡報」『文物』1998年第8期
鄒厚本・書正 1998「徐州獅子山西漢墓的金扣腰帶」『文物』1998年第8期
王新宇・魏堅 2004「察右中旗七郎山墓地」『内蒙古地区鮮卑墓葬的發現与研究』内蒙古自治区文物考
古研究所 科学出版社 北京
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年發掘報告」
『考古學報』2004年第2期

〔図録〕

文浩・于堅 1983『中国内蒙北方騎馬民族文物展』日本経済新聞社 東京
遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』遼寧人民出版社 潘陽(日本語版 独法・奈良文化財研
究所 2004 奈良)

【挿図出典】

図1：孫機2001 図18-6

図2：孫機2001 図18-15

図3-1：田広金ほか1986 図版6・7、3-2・3：吉林省文物考古研究所1987 図58～60、3-4・5：文
浩・于堅1983 54・55、3-6・7：内蒙古文物考古研究所1994 図10・12、3-8：烏蘭察布博物館
1994、3-9：内蒙古文物考古研究所・呼倫貝爾盟管理站・額爾古納右旗文物管理所1994 図12、3-
10：内蒙古自治区文物考古研究所2004 図35

図4：遼寧省文物考古研究所2002 図版72

図5-1・2：遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所2004 図22、5-3：遼寧省文物
考古研究所・朝陽市博物館1997b 図35、5-4～6：田立坤1996 図7、5-7～9：田立坤1994 図5

図6-1：定県博物館1973 図2、6-2：再掲図4-2、6-3：遼寧省文物考古研究所2002 図版71、6-
4：遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館1997a 図32、6-5・6：再掲図3-8・9